

ナイル・エチオピア上空を

飛んだ人々

青木 澄夫

明治以降第二次世界大戦に至るまでの間、ナイル川の上中流域やエチオピアの地を訪問した日本人はそれほど多くはない。それでもこれらの人々の中には、白ナイルや青ナイルを空から眺めるといふ珍しい経験をした人々がいた。いったいこれらナイル・エチオピアの空の旅を楽しんだ、「飛んでた」日本人は、いかなる理由でどのようにして大空を舞ったのか。ここでは、日本人外交官の伝えるエチオピア人の初飛行の様と合わせて、ナイル・エチオピアの上空を旅した3組の日本人達の足跡を追ってみよう。

1. エチオピア人の初飛行

日本人が動力飛行機で日本の空を飛んだのは、明治43(1910)年12月14日に陸軍大尉日野熊蔵が、2メートルの高さで100メートルの距離の飛行に成功したのが始まりだという。爾来日本の航空業界は目覚ましい発展を遂げ、今では世界中にそのネット・ワークを張り巡らしている。ただ唯一アフリカ大陸は日本の得意領域ではないらしく、かつて日本の機体を見かけることのできたエジプトの地にすら、今は見ることはできない。

1930(昭和5)年10月13日、エチオピアの首都アジス・アベバでは、外国人飛行士に混じって二人のエチオピア青年が緊張の面持ちで操縦かんを握っていた。ジプチ・エチオピア鉄道以外これと言った交通機関を持たないエチオピアでは、皇帝ハイレ=セラシエをはじめとするお偉方の国内移動には、主に飛行機が利用されていた。もちろん操縦士は全てお雇い外国人である。それが今日ではエチオピア史上初めてエチオピア人による空中

飛行が行なわれるのだ。それも単なる飛行ではない。今年即位したばかりの皇帝の目前でおこなわれる御前飛行である。

飛行士の氏名、飛行距離、高度等については不明だが、飛行はうまくいったらしい。「数年前までは電気も自動車の存在も知らなかったこの国の人たちが、いまや飛行機を操縦するようになるとは」。ポート・サイドの副領事時代にエチオピアをもカバーしていた黒木時太郎は、新しい赴任地のサイゴンでこの情報に接し、驚嘆の声を上げて本国に連絡した。(外交資料館資料)

2. 日本人で初めてナイル・エチオピア上空を飛んだ人

日本人でナイル・エチオピア地域を初めて飛行した日本人は、明治35(1902)年当時パリに住んでいた理学士の一条武文、新聞記者の有田有男、探偵の轟十蔵という三名である。三人はフランス人の仲間と共に一条が製作した飛行機でパリを飛び立ち、コンスタンチンを経由し、ライバルのフランス人発明家と競争して、アフリカのサリマ湖に咲くという懸賞のかかった虹色の花を求めていた。途中仲間のフランス人の恋人達がライバルに誘拐される事件もおきたが、まずはサリマ湖の花を入手し、今度は行方不明になった恋人捜しだ。サハラ砂漠を漂い、スーダン地方からコンゴやナイル川の水源地アルバート湖を見下ろしながら、アビシニアル国の地方都市カメラン市に着陸した。カメランの人々は飛行艇が珍しいので沢山集まって歓迎してくれたが、恋人は見つからない。

ところが正義は最後には勝つもので、陸と空か

らの探索の末、ライバルのフランス人から誘拐者を取り戻すことができ、めでたし全員無事にパリまで帰着し賞金も入手できた。

すでにおわかりのとおり、これはフィクションであって事実ではない。明治35、6年に押川春浪が発表した『空中飛行艇』と『続空中飛行艇』の主人公たちの冒険物語である。

3. モダン侯爵のナイル空中の旅

マスカリン諸島に住んでいた幻の鳥ドーダーを研究した殿様探検家こと侯爵蜂須賀正氏がベルギー隊の一員としてコンゴ地方を狩猟探検したのは昭和6（1931）年のことである。日本人初のアフリカ探検隊となった蜂須賀一行は、1月にモンバサに上陸し大型トラックに食料品などを満載して、ナイロビを経由しながら4週間後にはヴィクトリア湖畔まで辿り着いた。ベルギーのドリン殿下と合流したのはコンゴに到着してからだ。

ベルギーの博物館には動物標本を寄贈することを約束し、大英博物館からはゴリラの巣を持ち帰るよう依頼された蜂須賀たちは、珍しい動物の標本を作りながら、ゴリラの故郷ムブンビロ山脈を歩き回った。この時同行した三好武二氏は、後に京大隊が幾度となく登るこの地方の最高峰カリシンベ（4507 m）の頂きに立った。これは日本人初のアフリカの高山登頂という記念すべき記録だ。

ところで、ここでは蜂須賀のコンゴ探検が主題ではない。ここで紹介するのは、自動車でアフリカに入った蜂須賀と三好が、帰りにはナイルを源流から遡ってカイロまで飛行機で真正正銘の日本人初の空の旅をおこなったことである。

ロンドン-ケープ・タウンを結ぶアフリカ縦断空路が開通したのは1931年の夏だ。その直後にコンゴでの調査を終えたふたりは、カイロまでの飛行機利用を思いつき、アルバート湖畔のブツアバの飛行場から120キロ離れたホテルまでたどり着いた。カセセカフォート・ポータルのいずれかが中央アフリカ最後の地になったのだろう。

飛行機は週一便の英帝国航空会社の水上艇で、

ブリストル・ジュピターの発動機三機を装着したデ・ハヴィランド製の14人乗りである。カイロ迄の行程は4日間で宿泊代、食事代を含めてひとり400円。これが5000キロのナイル川下りを徒歩と汽船と汽車で、ふたり分5000円を要する陸路で踏破するかわりの対価である。相客は南アの鉱山師と商人、コロンビア大学教授の家族など数人と満載の郵便物だ。

水上艇は定刻より大分遅れて離陸したが、すぐにアルバート湖は遠ざかり、予想以上に細いナイルの流れやライオン、シマウマ、キリンなど野生動物が張子のように真下に見える。ナイルが樋の歯のように分流し水草が密生している地点を越すと、そこは南部スーダンの町ジュバだった。小邑ジュバのホテルではライオンやハイエナの唸り声が聞こえ、「土人」はライオンの子を売りに来た。50円で手離すというが、規定上飛行機には乗せられないので残念だが諦めた。

この夜は暴風が吹き荒れ、ナイルの川面も強く波打った。そのためナイル川に浮かんでいた水上機はフロートがもぎ取られ、翌日以降の飛行は不能となってしまった。唯一の通信機関である無線も思うように繋がらなく、なす術もなく5日間が過ぎた。ライオンの子だけが乗客の慰めだったので、救援機がハルツームから到着した時には全員が喜び勇んで出迎えた。

ジュバから暫く飛行を続けると、ナイル川に添った一部の緑を除けば、荒涼たる砂漠の世界が広がってきた。午前11時、昼飯のために着陸したが、温度計は華氏130度を示していた。飛行距離からしてここはマラカルであろうか。その日夕刻にハルツームに到着した。

ハルツームは文明の町だ。数ヶ月振りの電灯の光と氷にめぐり合い、冷蔵庫で冷したスイカとアイスクリームにむさぼりついた。ここでは交替の飛行機を待たねばならず、更に3日の滞在を余儀なくされたので、三好は時間を見つけてはオムドルマンに遊び、スーダン文化を楽しんだ。一方蜂須賀はマラリアによる発熱に悩んだが、医者がないので氷があるのは有難かった。

機内には山猫とカメレオンを持ち込んでいたが、ハルツームのホテルは設備が良すぎてカメレオンの餌の縄がない。そのためカメレオンは殆どが餓死してしまったが、彼らより21年前にハルツームを訪問した幣原坦も蚊のいないことに驚いた。

次の宿泊地はアスワンだ。古代遺跡やアスワン・ダムを見学したが、反英思想のためか英国ポンドが通用しないのが意外だった。

翌日は長かった旅行の最終日、カイロ迄の飛行だった。エジプトが初めての元気な三好は、ルクソールで降り古代遺跡見学へと向かったが、病人の蜂須賀はカイロに直行しこの空の旅は終了した。予定より6日も日数を要した10日間の空のナイル下りだったので、航空会社の社員はその出費に大いにぼやいた。

蜂須賀はこの後英国に戻り、探検には飛行機の利用が欠かせないと悟ったものか、飛行機の免許を取得し、日本人唯一のオーナー・パイロットとして自家用飛行機で帰国する。

マラリアによる屈辱感からか、意外なことに蜂須賀はこの日本人初のアフリカ調査旅行についてまとまった記録を日本語で残していない（と思う）。蜂須賀がこの地域を舞台にした研究としては、ケンブリッジ留学中に保養に訪れたエジプトで、鳥類について調査した処女作『埃及産鳥類』がある。徳島の殿様の末裔でありモダン侯爵として自由奔放に生きた蜂須賀の毀誉褒貶たる人生については最近刊行された伝記類に詳しい。尚、三好については『支那の土地と人』という本の訳者という以外詳しいことは知らない。

（三好『世界の処女地』、

蜂須賀「アフリカ猛獣奇談」）

4. 捕虜交換・カイロ-ロレンソ・マルケス4日間の旅

若き哲学者齋藤信治が、回教研究のためカイロに留学していた昭和16（1941）年12月8日、日本は第二次世界大戦に参戦し英国・エジプトと交戦国となった。これにより敵国人となったエジプト

在住日本人には逮捕命令がおり、多くは一時刑務所に収容された。その後全員釈放されたが、公使館での軟禁生活が命じられその期間は8ヶ月にも及んだ。

翌17年8月19日、これら軟禁生活を送っていた5才の少女を含む日本人20名に、捕虜交換のための移動命令が出た。英国軍差し向けの飛行機により、はるか彼方の南部アフリカのモザンビークで、連合軍捕虜と交換されるためだ。思いがけないこととはいえ、例を見ないアフリカ縦断飛行となったが、既に飛行機には南アフリカに向う英国軍人が先客として20名ほど乗っていた。

初日の飛行はナイル川をたどるように砂漠の上空を飛び、白ナイルと青ナイルの合流点ハルツーム迄だった。空から見る白ナイルは牛乳を流したような白色だったが、青ナイルはむしろ濃いチョコレート色といったほうが良い。だが、ここで斉藤はちょっとしたミスをした。エチオピアから来る川幅の狭い川を白、川幅の広いほうを青と勘違いしてしまった。

ゴードンの壮烈な死で有名なこの町では、ホテルに放り込まれたまま外出は許可されなかった。町の見物ができなかったのも、この町の記憶といえぱ一向に暑さを和らげない巨大な扇風機のうなり音と生温かいビール、それにブラック・アフリカを思わせる象牙細工や木彫り製品だった。

二日目はハルツームからヴィクトリア湖迄飛んだ。南下するにしたがい砂漠は消え、いつのまにか目の下は森林地帯となり、蛇のように三流にも四流にもナイルはその姿を変貌させた。人食人種の住むという森林地帯の間にはどんぐりのような格好の「土人」の家が散在し、白く動いていたのは牛だ。ナイル川がヴィクトリア湖から流れ出すその現場を見たかったが、飛行機の航路が外れていたためか見落としてしまった。

この日の宿はキスムだった。洋館の立ち並ぶ気のきいた文化都市だ。赤道直下にもかかわらず標高が高いせいか日本の初秋くらいの気候で虫の音さえした。車窓からの風景は、砂漠の国から来たせいもあってまるで帰国したような気分させる

し、心地よい高原の一夜は、前夜の寝不足を補って充分すぎるほどの快適さだ。

三日目は針路を東南に向けインド洋海岸へと進んだ。モンバサ港の上空なのか、海岸に出る直前には飛行機の窓は嚴重に黒幕で覆われた。

到着したモザンビークは、宗主国ポルトガルが中立国だったので、自由行動が許された。町に出ても誰も尾行しない、誰に話しかけても叱られない。八カ月ぶりの自由行動なので、ワインを買って久し振りに楽しんだ。

四日目はいよいよ最終日、捕虜交換の地ロレンソ・マルケスに到着だ。ここで映画を見たが、連合国側と枢軸国側のニュースが同時に上映され、かつ中立国のため公平を期し拍手等の意思表示は禁止されていた。久しぶりにパンの白さが目にしみた。

斎藤他20人は、ロレンソ・マルケスからまもなく迎えに来た龍田丸に乗って、泥沼の戦争へと転げ落ちていく祖国へと向かった。

斎藤は、ブラック・アフリカ4ヶ所の印象を「アフリカは美しく住み良い所だの一語につき。私の見聞しえた限りアフリカはどこにいても気候は爽やかに、食物は豊かに、風景は美しかった……。アフリカが世界史の精神的自覚の過程の中にとりいれられて重要な役割を果たしている日もさう遠くはあるまい……」と記した。

余談ながらカイロで軟禁されていた20人の内に軽業師がいた。彼は数人のエジプト人の弟子を持っていたが、別れの夜には弟子達が集まり一晩中泣いて別れを惜しんだ。このYというイニシャルの男、日本語はカタカナも満足に読めなかったが、ロシア語・イタリア語に堪能でヨーロッパを興業して歩いていたという。幕末以来続いていた日本の旅芸人・大道芸人の海外での伝統は、どこいアフリカの大地でも生きていた。斎藤はエジプト人弟子に慕われる庶民Yの姿を暖かい眼差しで見守った。(斎藤『沙漠の人間』)

[あおき すみお 国際協力事業団]